

# 裁判劇「恋と炎のあるぷす放火殺人事件」 (平成14年5月17日開催) 概要

主催：信州の司法制度懇談会・長野県弁護士会・信州大学

後援：長野県・松本市・長野市

## I. はじめに

1. 信州の司法制度懇談会、長野県弁護士会および信州大学では、平成13年6月の司法制度改革審議会意見書、同年11月に成立した司法制度改革推進法に基づいて行われている一連の司法制度改革の動き、特にその改革の一環として導入が検討されている「裁判員制度」の趣旨を市民にもわかりやすく伝え、「国民の司法参加」について広く検討することを目的として、裁判劇を上演することを企画した。

そして、平成14年5月17日、松本市「Mウィング」6階大ホールにて「検証！裁判員制度 あなたが裁判員ならどう裁く 裁判劇『恋と炎のあるぷす放火殺人事件』」を、長野県・松本市および長野市の後援を得て開催した。当日は、雨天にも関わらず350名を超える観客を集め、裁判制度に対する市民の関心の高さをうかがわせるものとなった。

2. この裁判劇は、長野県弁護士会所属の弁護士が中心となって、放火殺人事件の模擬裁判を行い、それに対して一般市民などから選ばれた陪審員役と弁護士が努める裁判官役から構成される4つの裁判体が評決を行うものとした。

当日は、まず栗林正清長野県弁護士会会長から「現在、国民に近い司法を目指した司法改革が進められており、近い将来に国民が刑事裁判に裁判員として参加することが考えられるので、その制度がどのようなものであるのかをぜひ理解していただきたい。また、裁判員として劇に参加して被告人が有罪であるか無罪であるかを考えていただきたい」旨の式辞があった。さらに、

森本尚武信州の司法制度懇談会顧問・信州大学学長から「司法制度改革を推進するためには、法科大学院が全国に適正に配置されること、したがって長野県内に設置されることがぜひとも必要であり、そのためには県民の皆様の理解・協力が欠かせない。県下の司法制度の諸問題を協議するために設立された『信州の司法制度懇談会』の最初の企画であるこの裁判劇が長野県の司法制度改革のために有意義なものであることを期待する」旨の式辞があった。それに引き続いて、約3時間にわたる裁判劇が行なわれた。

## II. 裁判劇における「事件」の概要

この裁判劇では、架空の放火殺人事件について、逮捕・起訴された被告人をめぐる審理であり、被告人は捜査段階では捜査段階で自白したが、公判段階において否認に転じたという設定がなされた。

事件のあらすじは以下の通りである。

ある2階建民家で火災が発生し（最初の119番通報は午後10時27分）、その2階部分から当該建物に居住する夫婦A・Bの焼死体が発見された。出火付近である玄関に石油を撒いた痕跡があったことから、警察は放火殺人事件と断定して捜査を開始した。

そして、火災建物付近の畑の中の道で発見されたライターから、被害者である妻Bと不倫関係にあった被告人Xの指紋が検出されたこと、被害者である夫Aの差し出した、妻との不倫に関してXを脅迫する手紙がX宅から発見されたことから、Xを逮捕して取調べたところ、Xが不倫関係の清算などを目的として放火殺人を行ったと自白し、検察はXは放火殺人の犯人として起訴した。

ところが、公判段階においてXは、火災が発生する直前まで現場から約2.5キロメートル離れた居酒屋「あるぶす」で飲酒しており火災発生時には現場に居合わせることができないはずであるとのアリバイ、ならびに放火殺人の動機も存在しないことなどを主張して全面否認に転じた。

以上の事実を前提として、本件審理が行われた。

登場人物（裁判官，裁判員，検察官，弁護士以外）

X——本件裁判の被告人

A——本件放火殺人事件の被害者。Bの夫。生前，XとBとの不倫に気づき，Xを脅迫していた。

B——本件放火殺人事件の被害者。Aの妻。Xと不倫関係にあった。

C——居酒屋「あるぷす」のママ

D——Xの知人。本件火災現場付近でXを見かける。

E——Xの取調べを担当した刑事。

### Ⅲ. 裁判の進行

#### 1. 冒頭手続および双方の冒頭陳述

裁判劇における法廷での様子は以下の通りであった。

まず冒頭手続がなされ，罪状認否において被告人Xは無罪を主張する。

検察官は，Xは被害者Aから，妻BとXとの不倫関係に関してXを脅迫する2通の手紙を受け取ったことをきっかけに，不倫相手Bを含めた夫婦を殺害しようと決意して，居酒屋「あるぷす」で飲酒后，午後9時50分頃に店を出て畑の中の近道を通して本件現場に向かい，午後10時20分頃に放火殺人を行ったとする冒頭陳述を行う。

これに対して弁護人から，Xは事件当夜に放映されたTV映画を見て，ある場面（β）を見てから居酒屋を出ている旨を主張しているが，それに基づけば居酒屋を出たのは午後10時20分頃になる，居酒屋から現場までは直線距離でも2.5km離れており，少なくとも火災の第一発見者の119番通報がなされた午後10時27分までに現場に到着して放火することは不可能であるとするアリバイ，および出火現場近くの畑の道からXのライターが発見されたのは現場付近に野次馬に行った際に落としたものにすぎない旨の無罪を主張する冒頭陳述がなされた。

## 2. 証拠調べ手続

### (1) 証拠調べの概要

それに引き続く証拠調べ手続は以下のように進行した。

#### ①居酒屋「あるぶす」のママCの証人尋問

：被告人Xが事件直前に居酒屋「あるぶす」で飲酒していたこと、および居酒屋を出た時間を立証するため

#### ②目撃者Dに対する証人尋問

：事件当時に火災建物付近で被告人を目撃したこと、およびその様子を立証するため

#### ③被告人質問

#### ④取調担当刑事Eに対する証人尋問

：Xの捜査段階における自白調書の信憑性を立証するため

### (2) 居酒屋のママCに対する証人尋問

まず、①居酒屋「あるぶす」のママCに対する証人尋問のポイントは、被告人が居酒屋を出た時刻に関してであった。

検察官の主尋問に対してCは、Xが店を出たのはTV映画のある場面(α)であり、それは午後9時50分頃のものであったと証言する。

これに対して、弁護側反対尋問の中では、CはXが店を出た時刻をTVの場面でしか覚えておらず時計で確認したわけではないこと、Xの様子を厨房からちらちらと見ていたにすぎないことが明らかとなった。

検察官の再主尋問、弁護人の再度の反対尋問においても、Xが店を出た時刻について必ずしもはっきり記憶していない様子であった。

### (3) 目撃証人Dに対する証人尋問

さらに、②出火現場近くでXを目撃したという証人Dに対する証人尋問が行われた。

検察側主尋問に対して、DはXと知り合いであるが、事件当日にはXは顔を隠すようであり普段と様子が違ったことを証言した。

しかし、弁護側反対尋問においては、Dが野次馬に行く際に瞬間的にXを目撃しただけであり、顔を隠すのではなく単に気落ちしてうなだれていたようにも見えたことを述べた。

(4) 被告人質問および相反部分に関する検面調書の朗読

これら証人尋問の後に③被告人Xに対する質問が行われた。

(i) まず弁護人からXに対して質問が行われた。

その中で、警察の取調段階で、Xが本件建物に放火した旨の調書に署名して拇印を押したがその内容は全くの誤りであること、署名して拇印を押したのは、犯行を認めれば死刑を免れることができると刑事に言われたためであり、検察での取調べでやはり犯行を認めた調書も、死刑を免れたい一心で言われるままに取られたものにすぎないと供述する。

またBと不倫関係にあったことは認め、被害者Aから送られた脅迫状に対しては、妻と別れてでもBと一緒にになりたいという愛情こそあれ、Aや、ましてBに対して殺意を抱いたことはないと主張した。

さらに、事件当夜のX自身の行動について、居酒屋「あるぶす」を出る時刻にTV映画で放映されていた場面は、居酒屋のママCの証言とは異なる午後10時20分頃に放映された場面(β)であること、店を出てからは検察の主張する畑の中の道ではなく、普通の道路を歩いて帰宅しようとしたが、Bの家が火災になっているのに気づき畑の中で燃えている様子を見ていたこと、熱風が来たのでポケットからハンカチを出して口を覆ったが、ひょっとしたらその際にライターを落としたかもしれないこと、現場付近でDには全く気づいておらず顔をそむけることはなかったことを述べる。

最後に、捜査段階では一切話さなかったことであるが、生前のBが、不倫発覚後、すなわちAからの1通目の脅迫状が来た後に、Xに対して「私にも覚悟がある」旨話していたことがあり、Bが放火して無理心中を図った可能性があることを供述した。

(ii) これに対して、検察官からXに対して、取調の様子、Aから脅迫を受けたときのXの心理状態、事件当夜の状況、放映されたTV映画について順

次反対尋問がなされた。

まず検察官はXに対して、警察・検察段階での取調調書について、Xは内容をきちんと聞いた上で署名して拇印を押したこと、その場で調書に関してほとんど訂正を求めていること、まして一度も犯行を否認していないことを念押しする。

そして、XはAに傷害の前科があることを知っており、そのような前科者からの脅迫に対してXは何ら具体的な解決策を考えていなかったことがやりとりの中で明らかとなり、検察官は、Xは自らの不倫を妻には一切話しておらず、AやBを殺すことによって一切を清算しようとしたのではないかと迫るがXは否定する。

また事件当夜の行動について、検察官は、居酒屋「あるぶす」に行ったのは時間調整のためではないのか、すなわち、XはTV映画を以前に映画館で見て、場面 $\alpha$ と $\beta$ との間に30分の時間差があることを知っており、それを利用してアリバイ作りをした、つまり実際に「あるぶす」を出たのは場面 $\alpha$ （午後9時50分）の頃だった可能性があること、「あるぶす」を出た後に畑の中の道を通ったのではないか、仕事でB宅を訪れた際に玄関に石油入りポリタンクがあることや玄関扉に鍵がかかっていないことを知っていたのではないか、そして火を放ったのではないか、要するに犯行を認めた自白調書に記載されたとおりの行動をしたのではないか等を次々と質問するが、Xはことごとく否定した。

そして、取調べでは警察官に誘導されて供述したにすぎないことを主張した。

(iii) そこで検察官は、事実に争いのある部分について検察段階での自白調書を朗読した。その要旨は以下の通りである。

傷害の前科者であるAからBとの不倫関係について脅迫されたために怖くなり、午後9時以降にはAは就寝することやその際にBも一緒に居ること、B宅の玄関には鍵がかかっておらず石油入りポリタンクがあることを知っており、放火してA・Bを殺害して一切を清算しようと思い立ったこと。

居酒屋「あるぶす」に行ったのは気分を昂揚させ、また時間を調整するためであり、「あるぶす」を出たのはTV映画の場面αであったこと。

その後、畑の中の道を小走りで行き30分後にB宅に到着して、玄関から内部にポリタンクの石油を撒いてライターで火を放ったこと、あわてて逃げたのでライターを落としてしまったらしく、畑の中で発見されたライターは犯行に使ったもので間違いないこと、現場に来たのとは違う経路で道路に出たが、現場の様子が気になったので、道路を通してB宅の様子を見に行き、その後道路を通して帰宅したこと。

#### (5) 取調担当刑事Eに対する証人尋問

④最後に、自白調書の信憑性を立証するために取調担当刑事Eの証人尋問が、検察官の申請に応じてなされた。

検察官の主尋問においてEは、取調べの初日はXは興奮状態にあって犯行について問答できず身上関係のみを調書に取ったが、翌日の午後にXが死刑だけにはなりたくないと言き出したので、正直に話すことが大事だと言った、しかし、死刑を免れることができると言ったことはない、後の検察官作成の自白調書と内容は同じであること、取調べの中で被告人を脅したり暴力を加えたことはない、Xから一ヶ所だけ調書について訂正を求められたが、それ以外に調書が事実と違うと主張されたことはなく、被告人は自ら署名して捺印を押したことを証言した。

これに対する弁護人の反対尋問でEは、Xは二日目の取調べが午前8時半頃から夜8時までだったこと、午前中にXは犯行を否定していたが、調書はその日一日としてとるので否認調書は作成していない、Xに対して犯行を認めなければ死刑になると言った覚えはないとの証言を行った。

しかしこれに対して、被告人は「あんたそう言ったじゃないか」と叫び声をあげて激しく抗議する。裁判長はXのEに対する質問を許したが、議論は平行線のままであった。

最後に弁護人は、Xが素直に供述しているという割には取調べが夜8時までかかっていることの理由を質問するが、Eは「確認をしながら作成した」

という曖昧な証言に終わった。

### 3. 検察官論告・弁護人最終弁論

証拠調べ手続が終了後に、裁判長から裁判員に対して、検察論告・弁護人最終弁論はあくまでも参考であり、事実認定は法廷に現れた証拠のみに基づいて自己の良心に従ってよってなされるべきである旨の説示がなされ、それから検察側の論告と弁護側から最終弁論がなされた。

#### (1) 検察官の論告

検察官の論告では、Aから不倫関係について脅迫を受けたXは、事態について何ら解決策を講じていないのであり、自白調書にあるようにA・B兩名を殺害して一切を清算しようと考えたことは自然であるとして動機が存在をまず主張する。

引き続いて、現場付近に落ちていたライターについて野次馬に來た際に落としたとするXの主張は不自然であること、居酒屋「あるふす」を出た時刻については、午後10時20分頃放映のTV映画の場面βを知っているのは以前にもその映画を見たことがあるのを利用した虚偽のアリバイ主張であり、実際にはママCが証言するように午後9時50分頃であったこと、その後畑の中の道を通して30分で現場に到着して犯行を行ったと考えるのが自然であることを述べる。

そして、公益を代表する警察官・検察官が、取調べの際に虚偽の自白を誘導して調書を作成するなどは考えられないこと、もし本当に行っていないのであれば死刑も考えられるような放火殺人という事件の重大さを考えるならば必死に無実を主張するはずであること、Bが無理心中を図ったのではというXの主張も、Bの死亡状況を考えれば不自然であること、以上が裁判員に対して述べられた。

#### (2) 弁護人の最終弁論

これに対し、弁護人は全面無罪を主張する最終弁論を行った。

まず、犯行を認めたXの自白調書に関しては、誰の助けもない孤独な状況



下で厳しい取調べがなされたのであり、捜査当局こそが被告人の自白が得られるか否かの最大の利害関係人であって、否認を続けければ死刑に処される可能性をちらつかせられれば、生き延びたい一心で虚偽の自白をしてしまうのは当然であることを、いったん署名・押印のある自白調書が作成されるとXはそれに抵抗することは不可能になってしまうことを念頭におけば、自白調書の内容にはまったく信憑性がないことを述べる。

続いて、XがAから脅迫された際に何らの策を講じ得ないことは、不倫関係にある場合にはよくあることであり、妻との離婚を考えるほど愛していたBをXが殺害することは考えられないとして動機の内容も否定する。

さらに、居酒屋「あるぶす」を出た時刻についてCの証言は曖昧であり、9時50分頃に出たとは立証できておらず、Xが映画の筋書きを覚えており虚偽のアリバイ工作をしたとする検察官の主張には無理があり、Xのアリバイは成立すること、ライターは火災発生後に野次馬に行った際に落としたものにすぎないこと、生前のXとBとの会話から無理心中を図った可能性は十分考えられること、以上を次々と主張する。

そして最後に、検察官はXを有罪とするにつき100%の立証責任を負っているが、弁護側はXが犯人でないことを完全に立証する必要はなく、Xが本件犯行を行ったと認めるについて合理的な疑いを差し挟む余地があれば無罪と判断すべきことを訴えた。

#### 4. 裁判員に対する説示および争点

最後に、裁判員に対し、判断の際に従うべき義務に関して裁判官の説示がなされた。

被告人が現住建造物放火罪と殺人罪の成立が問題となること、それを判断するについて考慮すべき争点は以下の4点であることが示された。

- |                                                                                                               |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"><li>①被告人Xに被害者を殺害する動機があるか</li><li>②現場付近で発見されたXのライターはどういう事情で落とされたのか</li></ul> |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

③Xに本件犯行時のアリバイが成立するのか

④被告人の自白調書は信用できるのかどうか

そして、Xの有罪について立証責任は検察官にあり、Xは自己の無罪について立証する必要は必ずしもないこと、法廷に出た証拠に関して、裁判員の常識と良心に基づいて、被告人が犯人であると認定することに関し、合理的な疑いはないと判断すれば有罪の評決を、合理的な疑いが残ると判断すれば無罪の評決をすることは義務であることを、個人的な感情等で判断してはならないことが説示される。

また評決の仕方について、結論を先に述べるのではなくまず十分な議論をすべきこと、他の裁判員の意見に納得すれば意見を変えることは自由だが、意見の多少により自己の意見を変更してはならないことも同時に説示された。

以上が裁判劇における法廷の様子概要である。

#### Ⅳ. 評決結果

##### 1. 裁判体の構成

この裁判劇では、構成員および有罪認定の要件を異にする4つの裁判体を用意して、それぞれの裁判体ごとに評決をした。

それぞれの裁判体は以下の通りに構成した。

	構成員		有罪認定要件	
	裁判官	裁判員	裁判官	裁判員
A裁判体	3	9	有罪評決 2/3 以上	有罪評決 2/3 以上
B裁判体	1	12	全員一致の評議	
C裁判体	3	9	有罪評決 2/3 以上	有罪評決 2/3 以上
D裁判体	3	6	全体の 2/3 以上の有罪評決	

以下は、それぞれの裁判体の裁判長からの評決内容および結果の報告である。

## 2. A裁判体（裁判長一石曾根清光弁護士担当）

### (1) 各争点についての評議内容

#### 争点① 動機について

動機としては弱すぎるのではないかとの意見が多数を占めた。

- ・放火を決意したのであれば、手紙を捨てているのではないか
- ・40歳代でこんなバカなことをするのか疑問
- ・普通なら警察に駆け込むのではないか
- ・火をつけて殺せば死刑になることくらい判るはず

少数として、回りに脅かされていたことを秘密にしていたことは動機になるとする意見もあった。

#### 争点② ライターが落ちていた点について

決定的な証拠ではない、双方の主張はあり得る、放火を意図して行ったのであれば、気をつけて落とすことはないのではないかと、また、ライターを手持って現場から逃げ出すのではないかと、との意見が多数を占めた。

少数として、熱風がきてハンカチを出した時にライターが落ちたというのはおかしいという意見もあった。

#### 争点③ アリバイについて

ママの証言は曖昧で検察の立証は十分ではない。

犯行の計画性がないーテレビの時間によるアリバイは、放火という大罪と比較し、幼稚すぎる。

客がない店でのアリバイ工作はおかしい。

テレビはコマーシャルが入り、時間の調節が難しい。

として検察の立証はできていないとする意見が多数を占めた。

少数として、計画性が感じられる。島田と対面していることは放火した帰りに対面したと考えられる、ドラマの筋を十分判っているから時間調整ができるとする意見もあった。

#### 争点④ 自白調書について

今は、こんな取調べはしないのではないかと、自白調書に信憑性が

あるとした意見もあったが、多数は、信憑性を否定した（午後8時迄かかって調書が作られた点に問題がある。被告人の法廷での叫びからして、被告人は真実を述べているのではないか）。

## (2) 結 論

裁判官は3名はいずれも無罪、裁判員は無罪7名で有罪が2名であった。この裁判体は、裁判官2/3以上、裁判員2/3以上の有罪の意見があることが有罪判決の要件であるので、結論は無罪である。

## 3. B裁判体（裁判長—佐藤芳嗣弁護士担当）

### (1) 裁判体の構成について

B裁判体は、裁判長1人、裁判員12名、全員一致の評議により有罪の認定をすることができるという陪審に近い裁判体である。裁判長役の私は弁護士で52歳、裁判員は男性7人、女性5人であった。職業は、会社員、行政書士、生命保険面接士、マスコミ関係者、自営業、無職、学生など様々な職種で公募に応じた人である。年齢は20歳代5名、30歳代1名、40歳代2名、50歳代3名、80歳代1名であった。

### (2) 評議の進行について

評議は、裁判官役の私が進行役となり、評議ルールに従い論点ごとに行った。裁判官役の私は、評議の進行役に徹し、私自身は各論点について意見は述べず評議を進行させた。

裁判員は、公募に応じた人と信州大学の学生で互いに面識がなく、当初の2、3分は発言を躊躇する様子が見られた。しかし、50歳代の男性が最初に発言をした後は積極的な発言が続き、ほぼ全員が少なくとも一度は発言する結果となった。

限られた評議時間が設定されたため、各論点について裁判員の発言時間、人数を制限せざるを得なかった。しかし、各裁判員がそれぞれ自分の意見を持ち、また、他の裁判員の意見に真剣に耳を傾けている様子が十分認められた。

### (3) 評議の内容

#### ・争点①動機について

検察官の主張する動機は理解できるとの意見、検察官の動機の主張は殺人の動機としては弱いとの意見、本件では動機だけで殺人の事実認定はできないとの意見、放火場所は1階でありこの方法だと2階にいる人間を確実に殺すことができないとの意見、人により状況により殺人の動機は異なるのであるから動機をあまり重視してはいけない等の意見が出された。

#### ・争点②ライターが落ちていたことについて

ハンカチと一緒にポケットに入れていたライターがハンカチを取り出す時一緒に落ちたとの被告人の弁明は一応理解できるとの意見、アリバイ工作をするほどの犯人ならば物的証拠であるライターを安易に犯行現場の近くに落とすというへまは普通はしないとの意見、「ライターで火を付けた」ことの立証そのものができていないとの意見、犯行現場の近くに被告人のライターが落ちていたということは検察官にとっては有力な証拠であるとの意見が出された。

#### ・争点③アリバイについて

アリバイが成立するか否かについては、居酒屋のママの供述があいまいであり検察側も弁護側も双方とも立証に成功していないとの意見、被告人が犯人ならばアリバイ作りをもっとしっかり準備しているはずであり殺人を決意し実行した人のアリバイの主張とは思えないとの意見、弁護側はアリバイの立証に成功していない等の意見が出された。

#### ・争点④自白調書の信用性

この点の判断は難しいとの意見、一般論としては被告人が証言する警察官による自白の強要もあり得るとの意見が出された。評議時間がなくこの論点については十分議論できなかった。

#### ・その他の評議

被告人が主張するアリバイが成立するかどうかが本件の事実認定では重要であるが、検察官は被告人がスナックを出た時間について立証できていない

ので合理的疑いが残るとの意見、被告人が新聞を所持していたかどうかの捜査、被告人の足跡についての捜査が不十分などの意見が出された。

#### (4) 評議の結果

アリバイ崩しその他の点で検察官の立証不足との意見が多く、結果的には裁判員12名と裁判官1名の合計13名全員が無罪表決であった。

#### (5) 感想

裁判員の公募に応じた人で構成した裁判体という条件付ではあるが、法律専門家でない一般人が、有罪無罪の事実認定についてかなり程度の高い見識を示し、また、評議の場で臆することなく自分の意見を積極的に述べてくれたことが感動的であった。

また、評議が始まった当初は、検察官の主張に理解を示し有罪の心証を持っていたと思われた裁判員の一人が他の裁判員の意見を聞く中で有罪の心証を変えたと思われる。12人の裁判員がいて、一人では気付かない論点や疑問を他の裁判員から指摘され、心証を変えることがあり得ることが分かった。

裁判員制度の導入、まして、陪審制度の導入には職業裁判官のみならず弁護士層の間にも根強い反対論があることは事実である。しかし、私が今回B裁判体の裁判長として評議の進行役を努めた経験からすると、事実認定という次元で、職業裁判官の能力が一般人より優れているとは言い切れないと感じた。むしろ、一般人は自白調書偏重という悪弊に染まっていないだけに、「疑わしきは罰せず」の原則を評議の場で貫く可能性が高いと私は感じた。

200名程度の参加者がいれば成功と思っていたが、予想をはるかに超える約350人もの人が参加し会場を埋め尽くした。

法曹関係者は、市民の司法参加という大きな流れを止めるべきでなくより積極的に進めてしかるべだと強く感じた一日であった。

### 4. C裁判体（裁判長担当一繩田政幸弁護士）

#### (1) 争点①動機の有無について

裁判員の意見は「無い」6名、「ある」3名であった。

- ・「動機が無い」という意見が多数だったが、その理由は、様々であった。

(ア) 脅しの手紙の1枚や2枚で死刑になるようなことをするとは思えないという理由が2名。

(イ) 今回の2枚の手紙の内容だけでは、本当に殺す気かも知れないというような、不倫をされた相手の夫の怒りは伝わってこないから。

(ウ) 被告人は、行動力のない人間で成り行きまかせだから。

(エ) 自分の不倫相手の家が燃えているときに家に帰って寝ているような被告人には、被害者の生死へのこだわりが感じられない。愛情も殺意もなかったのでは。

(オ) 直感的にないと思ったから。

- ・「動機がある」という意見の理由は、

(ア) 被告人は冷たい人間だという印象を受けたから。

- ・②「動機は弱いがあった」が2名。不倫の後ろめたさもあると思う。

・裁判員の多数が、動機は無いとの意見だったのに対して、裁判官役の方は、2枚の手紙でも非常におそれるのではないかと、殺す以外に解決の手段がなかったのではないかとということで、動機ありが多数派であった。

## (2) 争点②ライターの遺留について

裁判員で意見を言った方は「被告人の犯行の根拠になり得ない」であった。

- ・「なり得ない」という理由は、

(ア) 被告人のいうようにポケットから取り出したときに落とすことは経験上よくあるが3名。

(イ) 落ちていた場所も、火事がよく見える場所だといえる。

(ウ) 自分が放火に使ったのならば、自分のライターではないという弁解をはじめにするはずなのに、はじめから自分のものと認めている。

(エ) ライターを手に持ったままドアを開けたというが、それでは開けにくいので不自然。

(オ) 通常小さいものは奥にはいるので、逃げる時ポケットから落ちたというのは不自然。

(カ) ライターの遺留だけで、100パーセント被告人の犯行というわけにはいかない。

(3) 争点③アリバイについて

裁判員で意見を言った方は、アリバイ工作はないとの意見であった。

・その理由は、

(ア) はじめからアリバイ工作を意識していたのならば、警察官の取り調べの初めに、アリバイの説明をするはず。それなのに被告人は、初め、やったやらないの押し問答から入っている。

(イ) ママは、厨房とカウンターを出入りしていたので、その記憶は信用できない。

(4) 争点④自白調書の信用性について

・裁判員の中で「信用性あり」との方は、ふつう、内容が正しくないと署名や拇印を押したりしないからという理由であった。

法廷で、取り調べをした警察官にくってかかった行動のみから、強制があったとはいえないとの意見もあった。

・裁判員の中で信用性なしとの意見の方の理由は、

(ア) 職業的に調書を作っている警察官が、法廷で答えに窮するところがあったから。

(イ) 被告人は事なかれ主義なので、内容が正しくなくてもその場限り署名をすることがあり得る。

との意見であった。

(5) 結 論

裁判官が3名全員が無罪であり、裁判員は2名が有罪、7名が無罪であり、結論は無罪である。

5. D裁判体（裁判長担当—山岸重幸弁護士）

(1) 裁判体構成員

①メンバー



裁判官 3 名

(裁判長 山岸重幸 右陪席 長瀬孝浩 左陪席 山崎泰正)

裁判員 6 名

80代 1 名, 50代 2 名, 40代 1 名, 30代 1 名, 20代 1 名

②有罪定足数

全体の 9 名のうち 6 名以上が有罪と評決した場合に、有罪とする。

(2) 評議の経過

- ① 裁判長から、有罪の場合には極刑もあり得ることを説明した。
- ② 裁判員に五十音順に結論のみを述べてもらう。
- ③ 全員の結論がそろった段階で、各自の立場から、理由付けを述べてもらう。
- ④ 各裁判官から争点についての考え方や疑問点を説明するも、裁判官としての結論は述べなかった。
- ⑤ ①～④の手順により、争点ごとに評議を進めた。
- ⑥ 評決集計及び評決結果の発表
- ⑦ 本件は、現在の実務では有罪か無罪かについて説明

(3) 各争点に関する裁判員の心証

	①	②	③	④	⑤
80代	無	弁	アリ	N	無
50代 A	有	検	ナシ	Y	有
50代 B	無	弁	アリ	N	無
40代	無	検	アリ	N	無
30代	無	弁	アリ(留保有)	N	無
20代	有	検	ナシ	Y	有

(註) ①～④は下記の争点, ⑤は評決

- ① 動機の有無 (有=動機あり, 無=動機なし)
- ② 現場付近にライターが落ちていたことについて  
(検=検察側主張の通り, 弁=弁護側主張の通り)

③ アリバイの有無（アリ＝アリバイあり，ナシ＝アリバイなし）

④ 被告人の取調段階の自白の信用性

（Y＝信用性あり，N＝信用性なし）

⑤ 評決（有＝有罪，無＝無罪）

(4) 裁判員の有罪・無罪の理由

争点①について

動機ありの立場から

- ・痴情のもつれから、殺意を持つことはあり得る。

動機なしの立場から

- ・動機として弱い
- ・動機として不自然

争点②について

検察官主張の通りとの立場から

- ・落ちていた場所が不自然
- ・火事場において、火から6mの距離まで近づくことは不可能

弁護側主張の通りとの立場から

- ・火事場において、火から6mの距離まで近づくことも風向き等の条件次第では可能である。
- ・ライターが落ちていたことで、直ちに火をつけたことにはならない。

争点③について

アリバイなしの立場から

- ・被告人の供述が曖昧である。

アリバイありの立場から

- ・ママの取調段階の証言が検察側の誘導によってとられた可能性が大きい。

争点④については評議の時間がなかった

(5) 裁判官の評決

3名とも有罪であり、理由は、現行実務と同様の考え方で心証を形成したためである。

#### (6) D裁判体の評決結果

有罪5名（裁判官3名、裁判員2名）、無罪4名（裁判官0名、裁判員4名）であり、結論として無罪となった。

#### (7) 裁判長を経験しての感想

職業裁判官と市民の感覚のズレを実感した。すなわち、現行刑事裁判は、明らかに市民感覚からずれていると思った。

また、改めて、一般市民の見識の高さと健全な良識に感心した。

最近、日弁連の速報によれば、裁判所、検察側が裁判員の数を減らす案を提案しているが、無罪事件の増加をおそれの発言以外の何者でもなく、日弁連としては、絶対に反対すべきであると考ええる。

但し、マスコミの注目を集め、尚かつ、報道によって既に有罪と決まったかの報道がなされている事件（例えば、和歌山毒入りカレー事件や宮城の看護士による筋弛緩剤投与事件）については、現行裁判制度より、無罪になる可能性は遥かに少ないと思う。

### V. アンケート結果

今回の裁判劇においては、参加者の意識を把握し今後の司法制度改革の参考とするために、裁判官・裁判員としての参加者と一般参加者とに分けてアンケート調査を実施した。アンケート総数211通、有罪が48通、無罪157通、その他6通であった。

以下はその結果である。

#### A. 裁判官・裁判員のアンケートの結果

1. 28名の参加者から回答があった。性別は男性19名、女性9名で、年齢構成は、20歳代10名、30歳代4名、40歳代6名、50歳代7名、70歳代1名だった。28名の回答のうち裁判官（弁護士が扮した）からの回答1名、その他の27名は一般参加者である裁判員からの回答であった。

2. 評議の方法について、①有罪・無罪の根拠を全般的に議論したとの回答が2名、②争点に分けて順番に議論したとの回答が24名、③その他として自分が被告人ならどうするかという観点から矛盾点を挙げていったという回答が1名であった。

実は、4つ設けた裁判体は争点ごとに評議をおこなう方針をとっていたのだが、その方針が正確に伝わらなかった可能性がある。評議時間が30分以下と短かったことが原因と考えられ、評議に相当の時間を投ずることが必要なことは言うまでもない。

3. 評議の中で十分に意見を述べることができたかという問いに対しては、①十分に意見を述べたという回答が17名、②述べられなかったという回答が11名であった。②の回答はいずれも時間が足りなかったことを理由とするものであり、やはり30分程度の評議時間では時間不足と言わざるを得ない。

また、①の中では、犯行動機について述べたという回答が3名、アリバイの点が3名、自白の点が1名、被告人がライターを落とした場所に関するものが3名、検察官の立証が不十分だという回答が1名であった。短時間の評議であったにもかかわらず、さまざまな論点について触れられていたことが認められる。

4. 裁判員が評議において意見を述べやすくなるための工夫について質問したところ、以下の結果が得られた（複数回答可）。

① 裁判官はできるだけ専門用語を避け、わかりやすい言葉で話さなければならない（21名）

② 評議はできる限り論点ごとに行う（11名）

③ 裁判官は、裁判員の意見が出やすいように配慮し、できる限り裁判員の意見を聞くようにしなければならない（18名）

④ 裁判官は、各論点ごとに各裁判員の意見が出そうまで、その論点について自らの意見を発言しない（14名）

⑤ 裁判官は、裁判員の意見の意味が不明確な場合、これらを明らかにする限度でのみ裁判員に質問できる（8名）

⑥ 結論について議論する場合、裁判官の意見表明の前に裁判員の意見を必ず聞かなければならない（12名）

⑦ その他の意見として、特定の裁判員が長時間・連続して発言すべきではない（21歳）、議長になる裁判官がその場を上手にしきり意見が出しやすくする必要がある（38歳）、十分な時間をとる（46歳）、裁判官は誘導してはならない（44歳）という意見があった。いずれも重要な指摘である。

5. やはり裁判官が評議において使用する用語には注意が必要であろう。法律の用語には専門用語あるいは難解な用語が多いので裁判官はこれを分かりやすく噛み砕いて裁判員に説明することが欠かせない。一般から選ばれる裁判員が審理に実質的に参加することの最低限の条件といえる。

裁判官が過度に議論をリードすると裁判員が意見を出しづらくなる危険性がある。また、裁判官が自己の見解を強引に述べれば裁判員に対する誘導になり、極端な場合には誤導になる危険性もある。裁判官は裁判員の判断過程ないし意見表明に徹底的に配慮することが必要であることは言うまでもない。

裁判員制度を導入したとしても裁判員が審理の対象を正しく認識し、判断し、意見表明することができなければ制度として機能することは期待できない。裁判員制度が適確に機能するために個々の裁判官が検討し配慮することが必要だが、それだけでは不十分である。裁判員制度の下で正しい結論を導き出すために必要な評議のルールを研究し、確立することが急務かつ重要である。

## B. 会場参加者のアンケートの結果

1. 112名の参加者から回答があった。性別は男性67名、女性45名で、年齢構成は、10歳代34名、20歳代51名、30歳代5名、40歳代9名、50歳代10名、60歳代1名、70歳代1名であった。

2. 本件裁判劇に対する会場参加者の結論は、有罪19名、無罪73名という結果であった。

3. 裁判員制度を採用する場合に裁判員と職業裁判官の人数の割合をどの程度にするべきかを質問した。

その結果は、

- ① 裁判員の人数が多いほうがよい (45名)
- ② 裁判官の人数が多いほうがよい (35名)
- ③ 同数がよい (26名)
- ④ その他 (7名)

という回答結果で、結論が分かれた。

・①の理由として、

裁判官の発言力が圧倒的である (63歳)、

裁判員制度を導入した趣旨に合致する (46歳)、

たくさんの情報が得られる (45歳)、

より公平な裁判が期待できる (76歳)、

裁判員は素人であるから人数が少ないと実効性が確保できない (37歳)、

良識と市民の声が反映される (53歳)、

少数では考えに偏りが出る (32歳・19歳)、

裁判官は方向整理をするだけでよい、裁判員の意見が結論を出すというのがこの制度の目的のはず (21歳)、

多角的に意見を出し合い矛盾をつきとめる必要があるから少数だと無理 (28歳)、

偏った意見を減らすためには多数の裁判員から意見を聞いたほうがよい (21歳)、

国民が納得するためには一般の国民である裁判員が多いほうがよい (21歳)、

国民参加・裁判制度監視から多いほうがよい (53歳)、

裁判官のほうが多いのではこれまでの制度と変わらない (20歳)、

開かれた司法という観点から多いほうがよい (29歳)、

裁判官が多いと専門用語などによって納得させられてしまう (19歳・47歳)、

一般市民の意見がもっとも公平である (22歳)、

法曹の世界だけでなく広い社会の意見を取り入れたほうがよい（年齢不明）、  
裁判員は感情に流されやすいし、裁判官は法律のみにしたがってしまう可能性がある  
ので裁判員と裁判官の比率は2対3の割合がよい（20歳）。

・②の理由として、

裁判員は感情で決めてしまうこともあるし、難しい審理となれば慣れた人が多いほうがよい（16歳）、

人の生命にかかわるので専門的知識が必要である（20歳）、

裁判員は素人なので専門的知識を有する裁判官が多いほうがよい（19歳・20歳・21歳・25歳・55歳）、

一般的な社会人が冷静に判断できるか不安（59歳）、

裁判員は状況に流されやすいため参考程度でよい（21歳）、

法律のプロが多いほうが公正な判断ができる（20歳）、

訓練を受けていない市民は感情に左右されやすい（21歳）、

市民に裁判が定着していない（19歳）、

一般人は同情して判断する可能性がある（19歳）、

マスコミ報道のために国民感情は左右されがち（20歳）。

・③の理由として、

同数でどちらの意見も平等であるほうがよい（21歳）、

同数が公平である（19歳が2名、20歳が4名）、

双方の主張が均等に反映できる（57歳、20歳）、

偏りをなくす（18歳）、

専門性と市民性から同一のほうが判断しやすいと感じる（56歳）、

裁判員は法の均衡よりも感情を優先する恐れがあるが、職業裁判官は法の均衡のみに偏向する恐れがある（19歳）、

法の専門化としての意見と一般人としての意見が対等の方がよい（19歳、20歳、21歳）。

・④の意見としては、

どちらでもよい（19歳）、

基本的には裁判員の数が多いほうがよいが、評決としては法のプロである裁判官に重みがあったほうがよい（31歳）、

裁判員制度は不要ではないか（22歳）。

4. 裁判員制度を採用する場合に裁判官と裁判員の人員構成を決定するうえで多くの事項を検討しなければならないであろう。ここでその全てを検討することはできないが、裁判員の人数をより多くすることに賛成であるとする回答が多かったのが今回の結果であった。

その理由としては、法律のプロである裁判官に対抗し、対等の意見を述べるためには裁判員の人数をより多数にすべきであるという考えが多数寄せられ、国民が裁判に参加する伝統を有しないわが国では考慮されるべき事項と考えられる。また、多様な意見が表明されるために裁判員の人数を増加すべきであるという意見も相当あった。これに対し、一般人は感情に流され、あるいはマスコミ報道に左右され冷静な判断ができないため小人数にすべきであるという懐疑的な意見も相当見られた。

5. 裁判員が評議において意見を述べやすくなるための工夫について質問したところ次のとおりであった（複数回答可）。

(1) 裁判官はできるだけ専門用語を避け、わかりやすい言葉で話さなければならない（85名）

(1) 評議はできる限り論点ごとに行う（31名）

(1) 裁判官は、裁判員の意見が出やすいように配慮し、できる限り裁判員の意見を聞くようにしなければならない（55名）

(1) 裁判官は、各論点ごとに各裁判員の意見が出そうまで、その論点について自らの意見を発言しない（30名）

(1) 裁判官は、裁判員の意見の意味が不明確な場合、これらを明らかにする限度でのみ裁判員に質問できる（35名）

(1) 結論について議論する場合、裁判官の意見表明の前に裁判員の意見を必ず聞かなければならない（47名）

Aの裁判官・裁判員に対するアンケート結果とほぼ同様の傾向の回答であ



った。裁判官が裁判員に対して専門用語等を分かりやすく噛み砕いて説明することや、裁判員の意見表明に徹底的に配慮することが必要であることが認めらる。

6. 将来あなたが裁判員候補者に選任されたとした場合に裁判員としての義務を果たそうと思うか否かを質問した。その結果は、①責任を果たそうと思う73名、②果たそうと思わない35名であった。裁判劇の来場者は裁判や司法制度に高い関心を抱いている方が多いと理解されるが、上記の結果から多くの国民が裁判員を受け入れる意思を有していると評価できると考えられる。その反面、自信がない、責任を負えない、適切な判断ができない、時間がないなどの理由で裁判員就任を回避する意見も多数あった。

司法制度を国民が理解できるようにするための働きかけが必要といえる。それぞれの理由として次のような意見が述べられていた。

・①の理由としては、

司法制度に興味関心がある (32歳, 19歳),  
市民の義務である (63歳, 53歳, 29歳, 23歳, 20歳),  
法律が正しく運用されることを望むため (20歳),  
人の人生を決める大事な場面である (29歳),  
同じ法の下に生活する者として (49歳),  
自分の意見を反映させるよい機会である (16歳),  
その人の人生がかかっている (20歳),  
司法が民間に裁判制度を委託するのであれば一国民として応えたい (21歳),  
裁判闘争を3件かかわっているので (53歳),  
自分の権利を守るためにも必要 (56歳),  
民主主義の当然の原則 (47歳, 43歳, 19歳),  
自分の身にいつ降りかかるか分からないことなので協力したい (19歳),  
制度が根付くために参加したい (29歳, 20歳),  
今後の日本にかかわることである (20歳),

裁判官の考えと違った世論の意見を反映させる（19歳）、  
制度に対する意思表示になる（53歳，18歳），  
プロの意見だけではなく，一般市民の意見も必要だから（20歳）。

・②の理由としては、

人様を裁くことができる人格ではない，大変である（46歳，37歳），  
責任が重過ぎる（19歳，20歳），  
間違った判断をしたら一生の問題である（54歳），  
忙しすぎる（45歳），  
法律に無知である（76歳），  
人の生命を左右する裁判で公正な判断ができるとは思わない（20歳），  
個人の身体・自由，尊厳，社会的地位を奪うことは責任重大であり，自分  
はその責任を負いたくない（21歳），  
罪を判定することはむずかしい（57歳），  
本当に真実を見ぬくことができるか分からない（55歳），  
感情が先に出てしまい冷静な判断ができない（22歳，20歳），  
面倒くさい，人にかかわりたくない（20歳），  
自信がない（52歳），  
時間に拘束されたくない（19歳），  
裁かれるならばプロに裁かれない（21歳），  
有罪にしそう（19歳），  
専門技術がない（19歳）。

## VI. 小 括

最後に，大門嗣二弁護士・裁判劇実行委員長による「『国民に基礎を置いた，国民に開かれた，国民の参加による新しい裁判制度を作ろう』という方向での司法改革について，その運動そのものに市民のみなさんが参加していただくきっかけになることを意図して企画した裁判劇であり，多数の市民の参加が得られたことに感謝している。これをきっかけに，日本の裁判のあり

方そのものに強い関心を寄せていただきたい。個人の感想として、特に若い人に対しては、この劇の被告人のように、最後まで自分の真実を貫くという姿勢を常に持たなければ、このような『ひどい裁判』に立たされることになることを念頭に置いてほしい」旨の挨拶があり、この裁判劇が締め括られた。

